流域連携「川の恵みを活かすフォーラム」

2018.10.29

農林中金総合研究所
主任研究員　田口　さつき

1　はじめに

2018 年秋に京都大学防災研究所の宇治川オープンラボラトリーで「第 8 回川の恵みを活かすフォーラム」が開催された。主催しているのは「京の川の恵みを活かす会」で、同会は淀川流域の自然の恵みを豊かにし、これを活かしていくことに賛同する学識者、内水面漁協、個人で構成された連携組織である。

フォーラムは、報告会と食味会の 2 部構成である。18 年度は、報告会が 10 月 27 日、食味会が 11 月 4 日であった。以下では、報告会を中心に流域連携について紹介したい。

2　川と海がつながった

「京の川の恵みを活かす会」（以下、活かす会）では、回遊性動物が往来する豊かな流域環境を取り戻すことを目指している。特に、天然アユは、川の豊かさの指標として捉えられている。それは、天然アユが遡上し生息できる環境をつくれば、他の生物も同様に増えるという考えからである。

ところで、アユの生態は、秋に川で孵化（ふか）し、冬の稚魚の間は海で過ごし、5 月頃川の中流部まで遡上し、その後成魚となり、秋に下流付近に卵を産み、一生を終える。活かす会では、堰や水門でのアユの遡上状況の調査、魚道の設置、改善などの活動を行ってきた。このような活動のなかで、回遊性動物を増やすためには、河口域や沿岸の生息環境を改善し、生存率を高める必要があるという結論に達した。

そこで、活かす会では、18 年 4 月から、大阪湾の河口域を管内とする大阪市漁協と連携を進め、報告会では「川の恵みと河口のつながり」をテーマとした。開会の挨拶で、京都大学防災研究所の中川一所長は、フォーラムが情報共有の場であり、いろいろな問題を積極的に相談してほしいと呼びかけた。次に、活かす会の代表でもある竹門康弘准教授が、大阪市漁協について河口域の環境改善という同じ目標を持っていること、回遊性動物を増やすだけでなく、食文化として活かしていくことを今後一緒に考えていきたいと、連携の重要性を語った。その後、大阪市漁協の畑中啓吾氏（写真1）が大阪市漁協の概況、河口域の環境浄化活動とその成果である「べっこうしじみ」のブランド化、加工品開発の取組みなどを紹介した。講演の後半では淀川河口域の漁業を紹介する映像が流れ、参加者からは「大阪に淀川のウナギを食べに行きたい」という声が出た。

写真 1

次に淀川河川事務所の稲垣茂人氏がアユの遡上促進策として淀川大堰の水位の調節やアユ

の遡上調査などについて報告した。参加者からは、堰の撤去について稲垣氏に質問するなど、並々ならぬ関心が感じられた。

そして、活かす会のサポーターである中筋祐司氏は、17 年冬に独自に行った大阪湾での仔アユの調査結果を報告した（写真2は中筋氏の報告の一部）。これまで、冬に仔アユが本当に大阪湾にいるのか、いるならばどこにいるのかが不明であった。中筋氏は、12 月上旬から翌年 4 月までの 15 回の観察で、大阪北港の岸壁沿いの水域で仔アユを確認し、その生育状況を観察した。参加者の関心は高く、セイゴ（出世魚：成魚がスズキ）により仔アユが残らず捕食された動画が流されると、食い入るように見入っていた。その後も、アユの遡上状況や生息状況など、漁協、学識者、活かす会サポーターから貴重な報告が続いた。

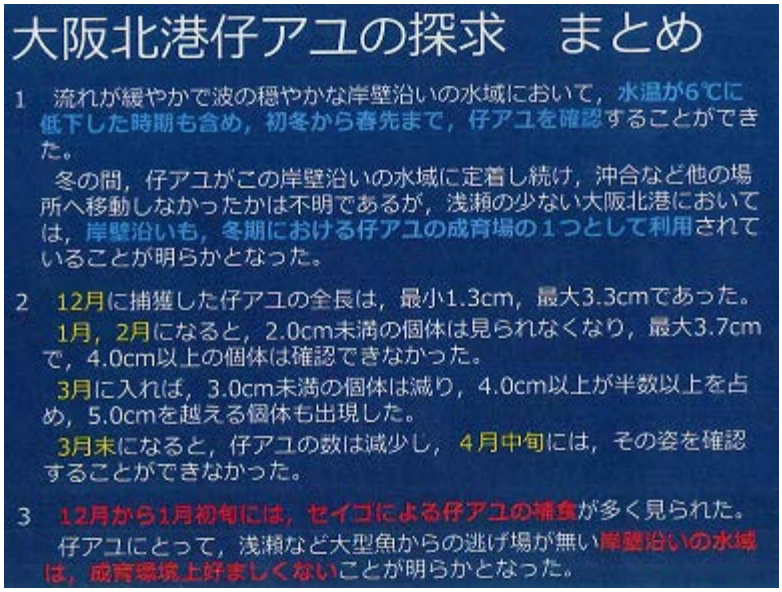

写真２

3 行政との連携も不可欠

川の恵みを増やし活かすための流域連携という議題で、活かす会代表の竹門氏がファシリテーターとなって討論会も行った。冒頭、①流域での拠点、②課題を解決するための予算、③組織の仕組みという課題を竹門氏は指摘した。

参加者からは、大阪湾の直立護岸では仔アユが逃げる場所がないことへの問題意識から大阪湾に浅場になる場所がないかという質問がでた。これに対し、大阪湾は現在、浅場になる所がなく、人工的につくるしか方法がないことがわかった。竹門氏からは、東京湾では都民のために砂浜を整備したが、それが生物にとってナーサリー（幼稚仔の保育場）の役割を果たしていることが紹介され、参加者の関心も高まった。

全体を通じて、開発と環境保全を両立させる難しさが浮き彫りになった。大阪湾では阪神なんば線の「淀川橋梁」架け替え工事が控えており、その影響が懸念されている。また、鴨川（三条）では西日本豪雨で被災した護岸の復旧作業への懸念が出された。復旧作業に関して、関連漁協への説明が十分ではないのではという意見もあった。さらに、環境改善のための活動や提案に対する行政の理解とより迅速な対応を求める声が多く聞かれた。行政の担当者が数年で交代してしまい、それまでの議論の積み重ねが断たれてしまうという問題も浮かび上がった。

フォーラムは、学識者、漁協関係者だけでなく、釣り愛好家など幅広い人々が集まり、淀川水系を連携して一体的に把握しようとする新たな試みである。川と海の連携がますます発展することを祈る。

（たぐち　さつき）